

# 場所を示す格助詞選択のストラテジー

—韓国語母語話者と中国語母語話者の比較—

蓮池 いずみ

キーワード 韓国語母語話者、中国語母語話者、ユニット形成、過剰一般化、母語の影響

## 1. はじめに

日本語学習者にとって、「に」、「で」、「を」のような、格助詞の場所を示す用法における使い分けは難しく、次のような誤用が生まれやすい。

- (1)名古屋に来る前は、京都で(→に)住んでいました。
- (2)昨日、学校の前に(→で)交通事故があったそうです。
- (3)車は道路の左に(→を)走らなければなりません。

日本語学習者の格助詞の習得を扱った研究の多くが、場所を示す助詞の中でも特に格助詞「に」と「で」の混同による誤用が多いことを報告している。また、最近では、学習者の誤用にはある共通したパターンがあることに注目し、学習者が「に」と「で」の選択の際に隣接する名詞の影響を受けるという説を支持する研究が出てきている。しかし、先行研究の多くは調査の対象とする学習者の母語やレベルが限られており、「に」と「で」の誤用の傾向や助詞選択ストラテジーが母語やレベルによって異なるのか、それとも全ての学習者に共通するものであるかについては明らかになっていない。本研究では、中国語話者と韓国語話者、計120名に対する横断的調査を行い、日本語学習者が用いる格助詞選択のストラテジーを、異なる母語とレベル間の比較を通して分析する。

## 2. 先行研究

場所を示す格助詞「に」と「で」の誤用に注目した研究の中でも、比較的日本語能力の低い学習者を対象としたものには、学習者に「に」の過剰一般化の現象が見られたことを報告するものが多い。久保田(1994)は、英語を母語とする初級学習者2名を対象にした縦断的研究で、両学習者に、場所を表す用法

の「に」と「で」の機能混同の中で、「に」を過剰一般化する傾向があると考察している。初級レベルの多国籍の学習者19名による作文の縦断的研究を行った福間（1996）にも同様の指摘があり、英語母語話者31名に対するインタビュー調査を行った岩崎（2001）でも初級レベルの学習者に同様の傾向が見られたとの報告がある。しかし、韓国人初級学習者2名の発話を対象に6ヶ月間の調査を行った松田、斎藤（1992）では「で」を選択する誤りが多かったとの報告があり、母語の違いにより助詞の選択に異なる特徴があることも考えられる。

一方、学習者の助詞選択ストラテジーに注目した研究は、学習者が近隣の語と助詞との「ユニット形成」（迫田2001）によって助詞を選択している可能性を指摘している。迫田（1998）は、中級レベルの中国語話者20名、韓国語話者20名、その他の外国語母語話者20名に対し助詞の穴埋めテストを行った結果、学習者の母語に関わらず「位置を示す名詞（例：中・前）＋に」、「地名・建物を示す名詞（例：東京・食堂）＋で」の「一語化」の傾向が見られたと報告している。初級～上級レベルの英語母語話者30名を対象とした増田（2001）の調査でも、同様の傾向が見られたとの報告がある。また、岩崎（2001）は、学習者が「に」の過剰一般化の次の段階として「特定の場所＝に」、「一般的な場所＝で」という使い分けを行う可能性を示している。一方で、上級レベルの中国語母語話者4名に対してインタビュー調査を行った坂本（2002）では、「位置＋に」の一語化現象がわずかに観察されたものの、「場所＋で」の一語化及び「に」の過剰一般化はいずれも観察されなかったと報告している。

### 3. 調査方法

#### 3-1 調査の対象

本研究では、先行研究の指摘する場所を示す格助詞「に」と「で」の選択ストラテジーが母語やレベルの異なる学習者に共通の現象であるのかどうかを調査するため、次の4つのグループの学習者各30名、計120名を調査対象とした。

- ・日本語能力上級レベルの韓国語母語話者（以下「AK」とする）
- ・日本語能力上級レベルの中国語母語話者（「AC」）
- ・日本語能力中級レベルの韓国語母語話者（「IK」）
- ・日本語能力中級レベルの中国語母語話者（「IC」）

日本語能力の判定については、以下のとおりとした。

- ・上級レベル...日本語能力試験1級合格者（日本滞在歴7年以上）。
- ・中級レベル...初級を終了し、名古屋市内の日本語教育機関において中級レ

ベルの教科書<sup>1</sup>を主教材とするクラスに在籍する学習者(日本滞在歴3年以内)。

### 3-2 調査の内容

学習者の助詞の正用、誤用の傾向と助詞選択ストラテジーを分析するため、

1) - 3) の3種類の調査を行った。

1) 格助詞の穴埋め式テスト

格助詞「に」、「で」、「を」が正答<sup>2</sup>となる問題各15問と、「と」が正答となる問題5問からなる計50問の穴埋め式問題。名詞の種類が助詞選択に及ぼす影響を見るため、格助詞の入る( )の直前に置く名詞は、以下にあげるA、B、Cの3グループ<sup>3</sup>から5つずつ、計15を使用し、同じ名詞を3回ずつ(「に」、「で」、「を」に各1回ずつ)用いた。

A-位置、方向などの抽象的関係を表す名詞： 前、中、上、左、ここ

B-地域、公共の施設、自然などの場所を表す名詞： 日本、京都、大学、道、海

C-その他の名詞： うち、部屋、階段、電車、入り口

なお、各格助詞を正答とする問題における用法<sup>4</sup>の内訳は以下のとおりである。

「に」： 着点(11問)、存在位置(4問)

「で」： 動作・出来事が行われる場所(13問)、範囲(2問)

「を」： 移動の経路・動作の場所(10問)、起点(5問)

2) 学習者の内省調査1

格助詞選択のヒントとなった部分に、学習者自身が下線をひく形式。学習者全員に対し、テスト中に行った(任意回答)。

3) 学習者の内省調査2

何を基準に格助詞選択を行ったかを調査するフォローアップインタビュー。筆記テスト後に、学習者の一部を対象に行った。

## 4. 調査結果—助詞の正答数と誤使用数—

格助詞選択テストを実施した結果、問題全体の正答率はA K (上級/韓国)が最も高く、次いでA C (上級/中国)、I K (中級/韓国)、I C (中級/中国)の順となった。学習者の正答数の平均を学習者のレベルと母語の2要因で分散分析にかけた結果、2要因とも有意な差があった[レベル： $F=137.51$ ,  $p<.001$ 、母語： $F=68.17$ ,  $p<.001$ ]。上級レベルの学習者の方が中級学習者より正

答数が多く、韓国語母語話者の方が中国語母語話者より正答数が多いということである。

では、正答数を格助詞別にみるとどうであろうか。図1は格助詞選択テストにおける各学習者グループの平均正答数を示したものである。助詞「に」、「で」、「を」の正答数を分散分析にかけ、Sidak法により助詞間の比較を行った結果、学習者全体では格助詞「を」の正答数が「に」、「で」より有意に少なく [ $F=17.89, p<.001$ ]、「に」と「で」の正答数の間に有意な差はみられなかった。しかし、韓国語話者においては「で」の正答数が「に」、「を」より有意に多く [ $F=19.48, p<.001$ ]、中国語話者においては「に」の正答数が「で」、「を」より有意に多かった [ $F=20.16, p<.001$ ]。これは韓国語話者にとっては「で」の問題が最も易しく、中国語話者にとっては「に」の問題が最も易しかったということを示している。「に」と「で」の難易度に関しては、レベルの違いよりも、母語の違いが大きく影響しているということがわかる。

この母語による違いは、正答数だけでなく、助詞の誤使用数にも現れている。図2は学習者が格助詞を誤って使用した数の平均値を示している。これをみると、各グループに共通して助詞の誤使用は「に」と「で」に集中しており、先行研究の指摘どおり「に」と「で」の間の混乱が顕著であることがわかる。しかしこの「に」と「で」の誤使用数を各グループで比較すると、韓国語母語話者では「に」と「で」の誤使用数に有意な差がみられなかったのに対し、中国語母語話者では「に」の誤使用数が「で」、「を」より有意に多かった [ $F=102.83, p<.001$ ]。つまり、中国語話者は正答数だけでなく誤答数でも「に」が最も多く、正用、誤用に関わらず「に」を多用する傾向があるということが示されている。特にI Cグループにおいてはその傾向が顕著であることから、中国語母語話者の中でも日本語能力の低いグループには「に」を過剰に使用する傾向があると推測できる。一方、韓国語母語話者では「に」と「で」の誤使用数に有意差がなかったことから、特定の助詞を過剰に使用する傾向は見られないと判断できる。韓国語話者では「に」より「で」の正答数が最も多かったことから考えても、韓国語母語話者と中国語母語話者では「に」と「で」の使用に明らかな違いがあることが見てとれる。

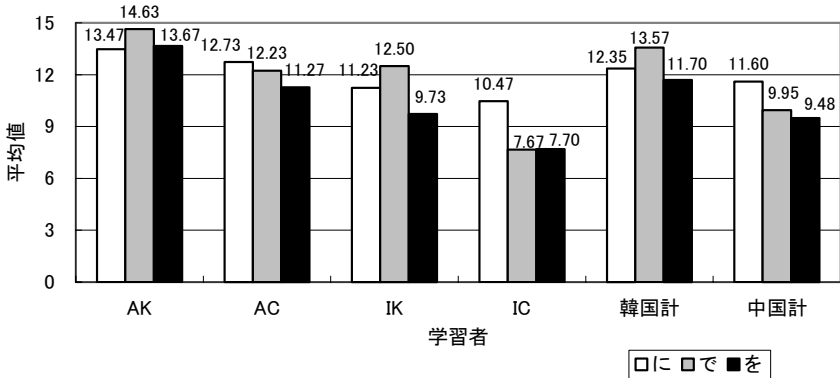


図1 助詞の正答数

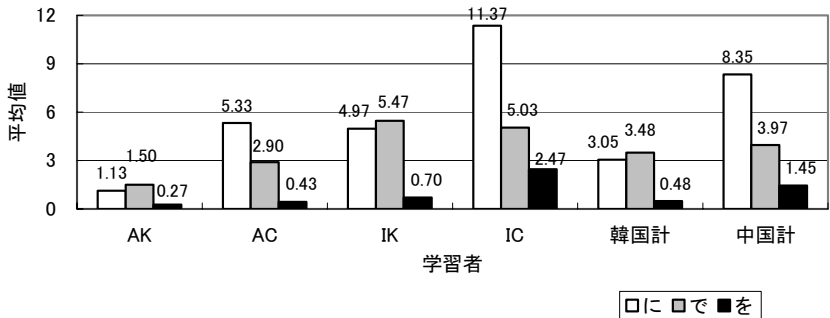


図2 助詞の誤使用数

## 5. 考察—格助詞選択のストラテジー—

助詞の正答数と誤使用数からは、韓国語母語話者と中国語母語話者の助詞「に」と「で」の使用傾向が異なることが明らかとなった。では、韓国語母語話者と中国語母語話者はそれぞれ、助詞選択の際にどのようなストラテジーを用いているのだろうか。「名詞＋助詞」のユニット形成ストラテジーの有無を含め、それぞれの母語話者に特有の助詞選択ストラテジーについて、助詞選択テストの解答及び内省調査の結果から分析する。

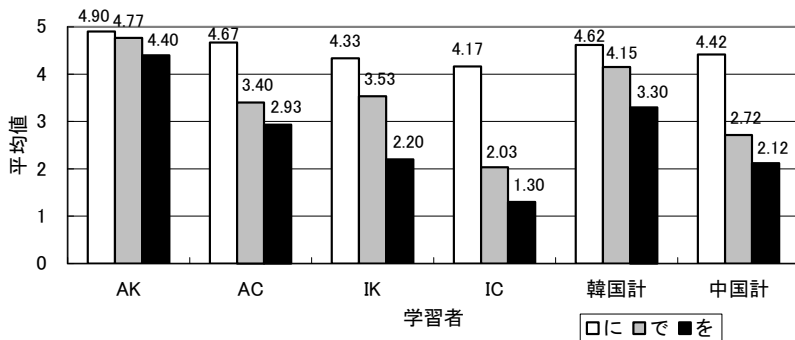


図3 名詞Aの正答数

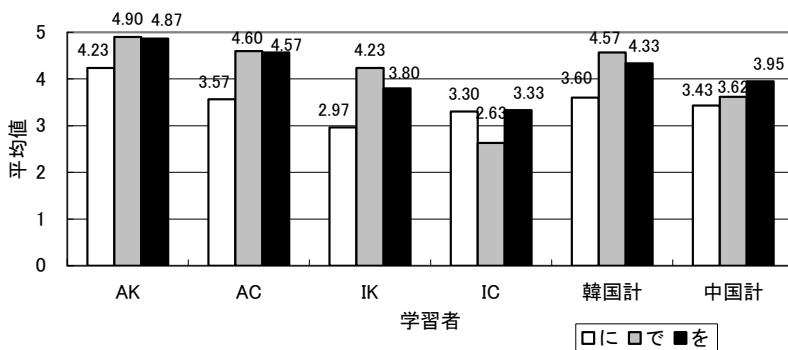


図4 名詞Bの正答数

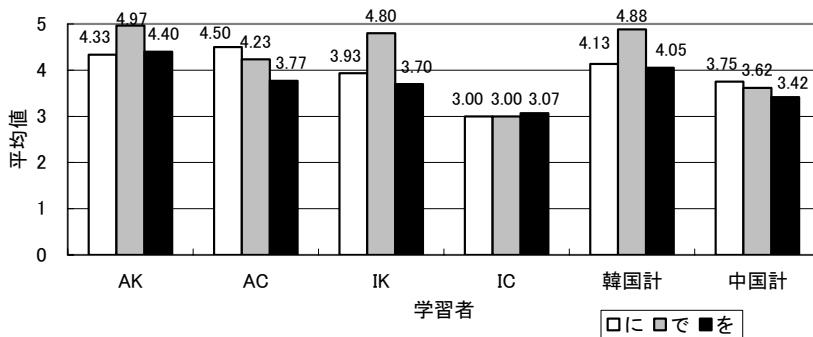


図5 名詞Cの正答数

### 5-1 韓国語母語話者

まず、「名詞+助詞」のユニット形成ストラテジー使用の可能性について検証する。迫田(1998)の調査では、学習者が場所を示す助詞を選択する際、「位置を示す名詞+に」、「地名・建物を示す名詞+で」の組み合わせで選択する傾向が見られたとの報告があるが、本研究の被験者にも同様の傾向が見られるのであろうか。図3-図5は、各名詞グループにおける格助詞の平均正答数を学習者グループ別に表したものである。図3は名詞A(位置、方向)、図4は名詞B(地域、公共の施設)、図5は名詞C(その他)が隣接したときの正答数である。韓国語母語話者の正答数について、名詞グループごとに分散分析を行い、Sidak法により助詞間の比較を行った結果、名詞Aにおいては「に」の正答数が「で」より有意に多く [ $F=32.47, p<.001$ ]、名詞B、Cではいずれも「で」の正答数が「に」より有意に多かった[名詞B: $F=19.99, p<.001$ 、名詞C: $F=29.02, p<.001$ ]。つまり、「位置を示す名詞+に」及び「地名・建物を示す名詞+で」の組み合わせの場合に正答数が高いということであり、先行研究の指摘する「助詞+名詞」の同様の傾向が現れているようにも見える。しかし、名詞Bだけでなく名詞Cにおいても「で」の正答数が多い点を見ると、「特に「地名」や「建物」を表す名詞が「で」との一語化を引き起こしやすいとは考えにくい。また、韓国語話者に対する内省調査の結果から、「名詞+助詞」の一語化の傾向は見えてこない。

内省調査の回答は、韓国語母語話者の助詞選択は「名詞+助詞」のユニット形成よりもむしろ母語である韓国語の影響が大きいことを示唆している。助詞の使い分けの基準を問うフォローアップインタビューで、中国語話者には、特定の語の存在をあげる学習者や、自分なりの使い分けの基準を説明する学習者が多かったのに対し、韓国語話者には、「なんとなく」、「文全体を見て」、「いつも使い慣れているから」などと答える学習者が多かった。これは、母語に日本語に対応する助詞を持たない中国語話者<sup>5</sup>が、習得過程において意識的に助詞と動詞との関係や助詞の使い分けに関する特徴に注目しながら学習してきたのに対し、母語に日本語に対応する助詞を持つ韓国語話者<sup>6</sup>は、無意識のうちにそれを身につけ、文中の語の存在よりも、むしろ母語における助詞の使い分けをヒントに助詞を選択しているということの現れであると考えられる。

今回の調査では、すべての格助詞において韓国語話者が中国語話者より高い平均正答率を得ており、「に」、「で」、「を」計45問のうち、大半は韓国語話者の正答率が中国語話者を上回っている。しかし、以下の8問では、韓国語話者の正答率が中国語話者の正答率より低くなっている(( )内が正答)。

(4)トイレはこの階段をあがって左(に)あります。

- (5)高校の時から、日本（に）留学したいと思っていました。  
 (6)名古屋に来る前は、京都（に）住んでいました。  
 (7)私は大学（に）勤めています。  
 (8)大阪行きの電車（に）乗って、京都で降ります  
 (9)店の入り口（に）近いところに車を止めましょう。  
 (10)日本（を）離れて10年になるので、最近の日本のことはわかりません。  
 (11)電車（を）降りてしばらく歩くと、海が見えます。
- (4)は、韓国、中国ともに高正答率であり、韓国語話者の正答率が低いというより、中国語話者の正答率が極端に高くなっていると言った方がよい。しかし(5)－(11)に関しては、日本語と母語の助詞の間に用法のずれがある例であり、以下の場合において、韓国語の表現を使ったための誤りであると考えられる。
- ・母語において、日本語の「で」にあたる韓国語の [eso] が使われる場合。  
 …(5)、(6)、(7)
  - ・母語において、日本語の「を」にあたる韓国語の [rul] が使われる場合。  
 …(8)
  - ・母語において、起点を表す用法として、日本語の「で」にあたる [eso] が使用可能な場合。…(9)、(10)、(11)

学習者の内省調査からも、これらの問題における誤答の多くが、母語の用法をそのまま日本語にあてはめたことによるものであることが明らかになっている。上の(5)－(11)のうち(8)以外の6問に関しては全て日本語の「で」にあたる [eso] が使用可能であるため、「に」や「を」の代わりに「で」を用いる誤りとなる。中国語母語話者では「に」、「で」、「を」のうち「に」の誤使用数が圧倒的に多かったのに対し、韓国語母語話者では「で」の誤使用数が比較的多かったのは、こうした母語の影響による誤りが多くを占めていたことが原因であると分析できる。

韓国語話者にとって、たいていの場合母語と対応する格助詞「に」、「で」、「を」の使い分けは、中国語話者に比べ習得が易しい一方、母語と対応しない場合には誤用の要因となり、その部分だけは中国語話者よりも習得が遅れると考えられる。韓国語話者においては母語からの類推ストラテジーが、誤用を生み出す最大の原因となっていると言ってよいのではないだろうか。また、上にあげた問題(4)－(11)でAKがACの正答率を上回るものはあっても、IKの正答率がAKの正答率を上回るものはないことから、同じ韓国語話者でも、中級学習者の方が上級学習者より母語の影響を受け易いことがわかる。従って韓国語を母語とする学習者に限っては、日本語習得の初期には母語からの類推が格助詞選択の主なストラテジーとして用いられ、習得が進むにつれて、母語の影響



による誤用が減少していくものと推測できる。

## 5-2 中国語母語話者

母語に日本語の助詞「に」や「で」に対応する文法要素をもたない中国語母語話者は、韓国語母語話者とは異なるストラテジーによって助詞を選択していると考えられる。格助詞選択テストの結果と内省調査の回答から分析すると、中国語話者には、文中の特定の語の影響による誤用が多いのが特徴的である。次の2問は、中国語話者の正答率が極端に低く、韓国語話者の正答率を40%以上も下回っている問題である。

(12) 昨日、学校の前（で）交通事故があったそうです。

(13) 来週、鈴木さんのうち（で）パーティーがあるそうです。

2問とも、動詞「ある」を含むという点で共通している。誤りの全てが「に」の誤選択であり、存在を意味する「ある」との混乱が誤答の主な原因であると考えられる。韓国語話者が動詞の意味を正確に捉えているのに対し、中国語話者にとっては動詞が「動作、出来事」を表すのか「存在」を表すのか等の区別が難しく、助詞を特定の動詞との組み合わせで選択している可能性が高いということが示されている。また、次の3問も、中国語話者の正答率の低さが目立つ問題である。

(14) このCDの中（で）一番好きな歌は何ですか。

(15) 彼は酒を飲んで、テーブルの上（で）歌ったり、踊ったりしました。

(16) 今朝、電車（で）田中さんによく似ている人を見ました。

誤選択内容はすべて「に」であり、インタビューでは、名詞「中」、「上」を、「に」を選択した理由にあげる学習者が多く、(16)に関しても、「電車の上だから」という答があった。よってこれらは、「位置・方向を示す名詞」の影響による誤りが多いとみられ、中国語話者は韓国語話者に比べ、名詞の種類に影響を受けやすいということが示されている。

中国語母語話者における「名詞+助詞」の一語化の傾向を分析するために、図3-図5に示した助詞の正答数を名詞グループ別に分散分析にかけ、Sidak法により助詞間の比較を行った。その結果、名詞Aにおける中国語母語話者の正答数は「に」の正答数が「で」より有意に多く [ $F=72.05, p<.001$ ]、名詞B、Cにおいては「に」と「で」の有意差がなかった。つまり、中国語母語話者には「位置を示す名詞+に」の一語化の傾向はあるものの「地名・建物を示す名詞+で」の一語化が起きている可能性は少ないということである。これは中国語母語話者に「位置・方向を示す名詞」と「に」とを結びつける傾向がみられるという助詞選択テスト及び内省調査の結果を支持するものである。特に中級

レベルの中国語話者は名詞Aだけでなく名詞B、Cにおいても比較的「に」の正答数が高く、名詞の種類に関わらず「に」を多用する傾向があるのが特徴的である。中国語母語話者の中でも日本語能力の低い学習者にみられる「に」の過剰一般化の傾向がここにも現れているといえる。

同じ中国語母語話者でも中級レベルと上級レベルとでは助詞選択戦略に違いがあることは、「に」と「で」の使い分け法を尋ねた内省調査2の回答からも明らかである。I Cグループには、格助詞選択の理由として「[場所]だから」、「こういう文型をよく聞くから」などという漠然とした理由や、「[中]だから」、「[ある]があるから」、「[～ている]だから」など、文型や文中のキーワードを理由としてあげる学習者が多かったが、A Cグループには、「[動作]だから」、「[帰着点]だから」などの明確な答や、「[に]は小さくて確かな場所を指し、「で」は広くて漠然とした場所を指す」、「[に]は範囲が広くて自由だが、「で」は範囲を限定する」などと、はっきりした使い分けの基準を自分自身の中に構築していると見られる答が多かった。次の問題の解答には、その傾向がよく現れている。

(17)この海(に)空港を作る計画があるそうです。

この問題では日本語能力の低いI Cの正答率がA Cの正答率を20%も上回っている。内省調査の結果、上級学習者の大半が「作る」という動詞に注目して選択しているのに対し、中級学習者の多くが、同じ問題文中の動詞「ある」に注目し、存在の「に」を選んだところ、結果的に「正答」となったということがわかった。従って、同じ中国語話者でも、中級レベルの学生は、この場合の「作る」のような格助詞の選択にかかわる動詞よりも、むしろ「ある」のような、選択の手がかりになりやすい動詞をキーワードとして格助詞を選択する傾向があることがわかる。一方、上級レベルの学生は、助詞の選択に関わる動詞に注目してはいるが、動詞の動作性、状態性の区別によって助詞を使い分ける傾向があり、(17)における「作る」のように、動作性の動詞が「に」をとる場合には誤用が生まれやすいと考えられる。

中国語母語話者には、韓国語母語話者とは異なる独特の助詞選択戦略が存在すると言ってよさそうである。韓国語話者と中国語話者の正用、誤用に見られた相違点には、異なる助詞選択戦略の使用が深く関わっていると推測することができる。

## 6. まとめ

本研究では、以下の結果が得られた。

- 1) 先行研究の指摘どおり、場所を示す格助詞のうち「に」と「で」の混乱が顕著であった。しかし、韓国語母語話者では「で」の正答数が多く、中国語母語話者では「に」の正答が多いという違いがあった。
- 2) 韓国語母語話者は、「名詞＋助詞」のユニット形成よりむしろ、母語からの類推により助詞を選択する傾向があった。特に中級レベルの学習者にこの傾向が顕著である。
- 3) 中国語母語話者には「に」を多用する傾向があり、中級レベルの中国語母語話者には「に」の過剰一般化の現象がみられた。
- 4) 中国語母語話者には、近隣の語（動詞、名詞）をヒントに助詞を選択する傾向が強かった。特に中級レベルの中国語母語話者は、「ある」など特定の動詞を、その意味に関わらずキーワードとして助詞選択に利用する傾向があった。
- 5) 中国語母語話者には「名詞＋助詞」のユニット形成ストラテジーのうち、「位置を示す名詞＋に」のみが見られ、「場所を示す名詞＋で」の一語化の傾向は見られなかった。

先行研究では、母語の影響を否定するか、十分な結果が得られないとする報告がほとんどであるが、本研究では、異なる母語間で正用、誤用の内容に明らかな違いが見られ、学習者の助詞選択のストラテジーに、母語の影響は深く関わってくる可能性を示唆する結果となった。今後さらに多様な学習者を対象とした調査を行うことにより、特定の母語話者に特有のストラテジーがあるのか、あるいは異なる母語をもつ学習者に共通するストラテジーがあるのかを明らかにしていくことが必要になるだろう。

## 注

- 1 『日本語中級J301—基礎から中級へ—』スリーエーネットワーク、『テーマ別中級で学ぶ日本語』研究社、『日本語表現文型中級Ⅰ、Ⅱ』凡人社、『現代日本語コース中級Ⅰ、Ⅱ』、名古屋大学出版会
- 2 日本語母語話者30名にテストした結果、全問題において90%以上の正答率（平均正答率98.7%）を得た。

- 3 分類は、池原ほか（1997）に従った。
- 4 分類は、益岡、田窪（1987）に従った。
- 5 水野（1987）によると、中国語の介詞〈在〉は、日本語の場所を示す格助詞「に」、「で」、「を」に対応する機能をもつ。
- 6 朴（1997）は、「韓国語の『e』『eso』の関係は日本語の『に』『で』の関係と殆ど同じである」（p.271）としている。ただし、『eso』は日本語の「から」と同じく動作・作用の移動の起点（出発点）を表す（p.270）場合もある。

## 参考文献

- 池原悟ほか（1997）『日本語語彙大系1 意味体系』岩波書店
- 岩崎典子（2001）「英語母語話者は「で」と「に」をどのように捉えているのか～インタビュー調査から見えてきたこと～」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.61-66、日本語教育学会
- 久保田美子（1994）「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号、pp.72-85、日本語教育学会
- 坂本勝信（2002）「上級レベルの日本語学習者の助詞の問題点を探る—存在を表す「に」・動作を表す「で」と自動詞に伴う「が」・他動詞に伴う「を」について—」『南山大学国際教育センター紀要』3、pp.51-62
- 迫田久美子（1998）「誤用を産み出す学習者のストラテジー—場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分け—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.128-134、日本語教育学会
- 迫田久美子（2001）「第2章 学習者の文法処理方法」野田尚史ほか『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 朴在權（1997）『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』勉誠社
- 蓮池いずみ（2000）『日本語学習者による格助詞選択のストラテジー—場所を示す格助詞「に」・「で」・「を」の使い分け調査から—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻修士論文
- 福間康子（1996）「作文からみた初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』第8号、pp.61-74 九州大学留学生センター
- 益岡隆志、田窪行則（1987）『日本語セルフマスターシリーズ3 格助詞』、くろしお出版

- 増田恭子 (2001) 「第二言語としての日本語学習者の場所格に関するストラテジーの使用の変化」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.55-60、日本語教育学会
- 松田由美子、斎藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第2号、pp.129-156、国際交流基金日本語センター
- 水野義道 (1987) 「場所を示す中国語の介詞<在>と日本語の格助詞「に」「で」」『日本語教育』62号、pp.105-117、日本語教育学会